
黄昏の告白

悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏の告白

【Nコード】

N1750M

【作者名】

悠

【あらすじ】

「好きなんだ」

「え、それって……」

「恋してるって方の、好きだ」 本文抜粋

リトルバスターズ来ヶ谷唯湖ルート（真）です。ありがちな話ですが、まあ軽い気持ちで読んで下されば幸いです。完全にネタバレしていますので、未プレイの方は注意。

（前書き）

無印クリア後くらいに突発的に書いたものを、改めて加筆修正したものです。ネタバレ満載もいいところですので、そこだけご注意を。

黄昏の告白

恭介が戻ってきて初めて主催したリトルバスターズの修学旅行から数日後。僕は放課後、来ヶ谷さんに呼び出されていた。

「どうしたの？ 来ヶ谷さん。話って？」

来ヶ谷さんは自分の席に座り、夕焼け空を見上げていた。

「…………… ああ、来たか。理樹君」

「うん。珍しいね。来ヶ谷さんが僕に話なんて」

「何、私にだつて理樹君と二人きりで話したいことくらいあるさ」
来ヶ谷さんはそこで初めてこちらに顔を向けた。

「話と言つのは他でもない。理樹君。また女装してくれないか？」

「いやいやいや、しないから」

改まっていきなり何を言い出すかと思えば……………。

「ふむ。駄目か」

「駄目だよ！」

「それは残念だ。まあ、冗談だが」
本当かなあ……………。

「…………… なに、ちよつとした昔話だよ」

「えっ……………？」

いきなり何だろう？ その疑問には答えず、来ヶ谷さんは語りだした。

「一人の女の子の…………… 昔々のお話だ。何でもできて周りからは天才と呼ばれていた、愚かな、感情のない機械のような少女の、な」

ふと、脳裏によぎるものがあつた。僕は前、この話を聞いたことがある……………？

「母は言った。満点のテストより、大会のトロフィーより、一度でいいからあなたの笑った顔が見てみたい、と」

まさか、これは……………。

「来ヶ谷さん、それって」

「話の腰を折るものではないぞ。理樹君」

「あつ、ごめん」

続けるぞ。といって来ヶ谷さんは話を再開した。

「無味乾燥とした日常。そんな日常を過ごしていた少女は出会ったのだよ。悪を退治する正義の味方、リトルバスターズと。リトルバスターズとの日々は、本当に楽しかった。彼らと居れば、感情がどうとか、そんなつまらんことで悩むこともない。そんな日々が、永遠に続けばいい。少女がそう願うのは、最早必然だった」

「来ヶ谷さん……」

ここまでくれば馬鹿でもわかる。その女の子は来ヶ谷さんのことだ。

「しかし、そんな幸せは長くは続かない。修学旅行へ向かうバス。その転落事故。生き残る二人を成長させるための世界。少女はその世界で、恋をした。助かった二人のうちの一人に。初めて芽生えたその想いに少女は戸惑いながらも嬉しく感じていたのさ」

そこで来ヶ谷さんはひとつため息をついた。

そう。これはあの世界での話。今まで決して語ることのなかった来ヶ谷さんの物語。

「だが、その世界は偽りの世界。ここでは少女に恋をしてくれた少年も、次のループに入ればそのことは忘れてしまふ。……それが、嫌だったのだろうな」

自嘲するかのような来ヶ谷さんの笑み。

「私は罪を犯した。皆が理樹君たちを成長させるために行動したというのに、私は一人、自分の番が永遠に続けばいいと願ってしまった。そして、私はその願いを叶えた。理樹君たちを、一日の中に閉じ込めることで。私は、理樹君との永遠を、望んでしまったのだよ」
今、思い出した。全てを。そうだ、そうだった。永遠に続く六月二十日。僕はその中にいた。そして、来ヶ谷さんの想いも、思い出した。

「来ヶ谷さん……」

「理樹君」

来ヶ谷さんはまっすぐに僕の目を見て言った。

「好きなんだ」

「それって……」

「ああ」

黄昏に染まる教室の中、来ヶ谷さんの表情は分からなかったけど。きつと、とても真剣な表情をしているんだろう。

「恋してるってほうの、好きだ……」

「来ヶ谷さん……」

「私は罪深い人間だ。恭介氏たちの思いを無駄にしてしまうところだった。だが、私はもう、耐えられない。本当は、理樹君が切りだしてくれるのを待っていたかった。理樹君が、あの世界での出来事を覚えていれば……その時は……そう、思っていたのに」

僕の答えは、もう決まっていた。

「来ヶ谷さん」

「好きです」

「……………え」

長い沈黙の後、来ヶ谷さんはその声を漏らした。

「僕も、好きです。来ヶ谷さん」

「それ、は……」

「うん」

僕も、気持ちを伝える。偽らざる、本当の気持ちを。

「きつと、恋してるってほうの、好き」

来ヶ谷さんは、膝から崩れ落ちた。あわてて支える。

「く、来ヶ谷さん!？」

「は、はは。すまない、理樹君。これではまるで、振られた女の子だな。せつかく、想いが叶ったのに」

来ヶ谷さんは泣き笑いのような顔になった。

「しかし理樹君。何故、オーケーしてくれたんだ？」

「……来ヶ谷さんが、好きだったからだよ」

来ヶ谷さんは顔を赤くした。

「い、いや、そうではなくてだな……。私は、断られると、思っていた」

「ここに来たときにいきなり言われていれば、断っていたかもしれないよ。けど、来ヶ谷さんの話を聞いて、全部思い出したら……」

断ることなんて、できなかった。

「ふむ。つまり、作戦勝ちか」

「作戦って……」

もう、来ヶ谷さんはいつもの調子に戻っていた。

「さて、いつまでもこんなところにも仕方ない。戻るとするか」

それがなんか悔しくて、僕はちよつとイタズラを仕掛けてみた。

「そうだね。じゃあ戻ろうか、“唯湖さん”」

「っ!？」

崩れ落ちた。支える。

「どうしたの？ 唯湖さん？」

「%&\$#*@!？」

あたふたしている。なんか……可愛い。

「り、理樹君！？ 何を……！」

「だって、恋人になったんだから名前で呼び合つくらい当然でしょ？ 唯湖さん」

「っ！？ いや、いや、だが私は」

「駄目……かな？」

「だ、駄目だ……」

「でも、恋人だし」

「う……いや、た、たまにだぞ！ たまになら……いい」

「わかったよ。唯湖さん」

「うっ……。おねーさん、最早大打撃だよ……」

後日。

「唯湖さん」

「っ！？ 理樹君、ひ、人前ではやめてくれ……」

ここぞというときに、唯湖さんをからかうことができ、僕はとても満足です。

（後書き）

来ヶ谷さんのルートは、本編クリア後に新たなエンドがあるだけあって一週目はまったく意味分かんないことばかりだったりもします。クドや美魚ルートも、現実離れた感じが強いですが、来ヶ谷さんのルートは本格的にファンタジー入ってますし……リフレイン後、CG回収目的だけじゃなく、改めて本文を見返したくなるルートですね。

あ、EXヒロインズは佳奈多以外の二人が完全にファンタジーですし、佳奈多も葉留佳ルート前提なので別。あれはリフレインクリア後前提ですからね。三人とも。

個人的には、美鳥や杉並さんルートがあって欲しかった……そしてあーちゃん先輩に立ち絵を！

それでは、悠でした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1750m/>

黄昏の告白

2010年10月8日10時30分発行